

December 2025

京都大学総合博物館 ニュースレター



2025 年度特別展「夢幻のかたち」

「数学」を展示する難しさと面白さへの挑戦——

2025 年度特別展「夢幻のかたち」.....2	大地は語る 2025.....8
ノーベル賞速報展.....3	博物館実習（館園実務）2025 実施報告.....9
総合博物館コレクション研究〈25〉.....4	今宮社神幸祭巡行.....9
夏休み学習教室 体験 EXPO2025.....6	招へい研究員.....10
子ども博物館だより〈9〉.....7	研究資源アーカイブ通信〈34〉.....11
レクチャーシリーズ（第 166 回）.....8	総合博物館日誌（2025 年 7 ～ 10 月）.....12

「数学」を展示する難しさと面白さへの挑戦

2025年度特別展「夢幻のかたち」

京都大学 2025 年度特別展「夢幻のかたち—数理の生み出す美と不思議—」が 2025 年 7 月 30 日より 8 月 31 日までの 1 カ月の期間で開催されました。

これまでの博物館においては、標本や資料など、モノを中心として展示企画を考えることが多いため、来館者からも動物や昆虫の標本、鉱物や土器など、モノがたくさんならぶ展示は人気が集まりやすい。それに対して本企画のテーマで掲げた「数学」は、当然ながらモノ資料が連想しにくい抽象的な思考を伴う学問であり、また同時に学生時代に数学という教科そのものに苦手意識をもっている人も決して少なくないため、正直に言えば博物館で展示するテーマとしては難解な分野の一つと言える。しかし、2025 年度特別展「夢幻のかたち」を監修された立木秀樹教授（京都大学 人間・環境学研究科）、松浦昭洋教授（東京電機大学）のお二人の研究は、この難解な数学を展示するにあたって一つの光明となる興味深い研究をされていたことと、お二人とも一般聴衆に対して数学の魅力を伝えるための工夫や機会に対して惜しみない努力を向けてくださる先生であったことが大きい。

そこで本特別展では、数理的な内容をそのまま説明するのではなく、芸術的なオブジェやインタラクティブな活動、パフォーマンスなどに昇華させることで、数学の生み出す形の美しさや物理現象の生み出す動きの不思議さで老若男女問わずにその興味関心を引き付ける力のある特別展示が実現した。



図1. シェルピンスキー四面体をつかった特別展ロゴサイン

立木教授が提案する「イマジナリーキューブ」は、フラクタル構造をもつ複雑な図形によって見る角度によってさまざまな形状を見せる。フラクタル図形の隙間だらけに見える立体が、ある特定の角度から眺めたときだけその隙間がすべて充填された完全な正方形の射影をつくるため、この性質を生かした入口サインが最初の展示品として設置された。来場者がチラシのロゴデザインと同じデザインを入口サインに見出した後、一步一步入口にむかって近づいてくると、徐々にその形状が崩れて隙間だらけのフラクタル構造に変身してしまうことに気づ

会期：2025 年 7 月 30 日（水）～ 8 月 31 日（日）

き、その驚きとともに二度三度と見返すことで、この特別展全体でどのように鑑賞すればよいかが説明されずとも体得できる導入展示となっている。

数学のさまざまな奥深い概念の中から、無限、フラクタル、多面体、曲面、射影、周期、軌跡、4 次元など、複雑な数学概念に忠実に設計された 3D プリント出力による立体図形が所せましと並び、それらを多彩な視点から眺め、触れ、光をあてて影をつくるなどすることで数学の一つの概念を肌身で感じることができる。その後で、この背後にある数学理論がどのようなものかに興味をもってくれば、というのが監修者の狙いでもある。

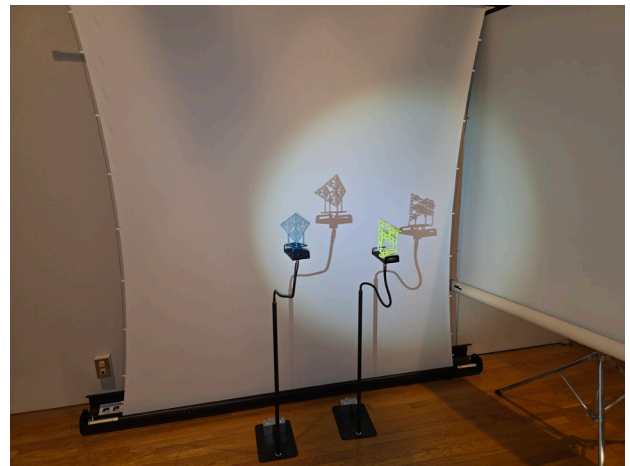


図2. 来館者が自分で懐中電灯でさまざまな影の形をつくってみる
ハンズオンコーナー

もう一人の監修者である松浦教授は、自身が数学者でありながら、国際的なジャグリング大会のファイナリストでもある。そのため、透明アクリルでできた独自の球面や円筒の装置のなかで繰り返される不思議なジャグリングパフォーマンスは、小さな子どもまでもが何分間も固唾をのんで見守るほどに魅力的で、パフォーマンスの終了後に、ジャグリングのボールが毎回元のある場所に戻ってくる不思議な軌道やそのタイミングについて、数理的な解説もしてくれた。観衆の多くが関心をもった不思議なパフォーマンスの裏に、数理的な構造が潜むという解説を聞いて学校で習ったのとは異なる数学との出会いを楽しんでいる様子であった。

タイトルの「夢幻」は、「無限」という数学上の概念にインスパイアされて名付けられた。「イマジナリーキューブ」の構成要素となるシェルピンスキー四面体のフラクタル図形も、同じ構造が無限に繰り返すことによる造形



図3. 松浦教授のジャグリングパフォーマンスに魅了された
たくさんの来館者

で、ジャグリングパフォーマンスでボールが描く軌道もまた無限大 ∞ のマークそのもののイメージが掛け合わされていた。就学前児童からオープンキャンパスで立ち寄った高校生、そしてその親御さんや一緒にこられたおじいちゃんおばあちゃんに至るまで、同じ図形をみて目を輝かせたり、不思議なボールの軌道に歓喜の声を上げたりする姿をみて、大学博物館らしい特別展のあり方をまた一つ見つけることができ、展示担当者冥利に尽きる企画の一つとなった。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)

ノーベル賞速報展

当館では、2025年のノーベル賞受賞者である北川進先生（化学賞）および坂口志文先生（生理学・医学賞）に関する速報展示を企画・実施いたしました。両氏は日本の科学研究を牽引してきたそれぞれのご専門の第一人者であり、その功績が国際的に高く評価されたことは、科学技術の未来に希望をもたらすものです。同じ大学に所属する学生、教職員の皆さんとも速やかに共有したいと考えたため、速報性を重視した展示としました。京都大学広報室、大阪大学広報課、さらに北川先生が拠点長を務められた京都大学物質・細胞統合システム拠点（iCeMS）と共同して、先生方の略歴、受賞研究の概要、過去に両先生の研究が紹介された記事の転載許可を速やかに得ることができ、パネル展示としました。また北川先生については、受賞発表時に京都大学の理事・副学長をお務めいただいていたことから、記者会見やその準備に関しても京都大学広報室が映像で記録しており、この映像をお借り

会期：2025年10月18日（土）～12月中旬（予定）



してダイジェスト版をループ再生させています。iCeMSからは北川先生の受賞研究の成果であるMOF（多孔性金属錯体）の実物もお借りすることができ、発表からわずか6営業日で充実した速報展示にこぎつけました。大学博物館としては、各部局との連携をさらに密にし、学内成果の社会発信支援をより充実させ、科学への関心を広げる契機としたいと考えています。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)



総合博物館コレクション研究〈25〉

長野県岡谷市海戸遺跡出土の縄文土器とその修復

長野県岡谷市に所在する海戸（かいど）遺跡は、縄文時代から平安時代までの複合遺跡です。遺跡は諏訪湖に面する低台地に広がり、縄文時代中期の竪穴住居が複数発見されています。大野雲外（1863–1938）が1905年に容器形土偶を紹介してから、今年で120年が経ちました。1966年に八幡一郎（1902–1987）が調査団長として実施した発掘調査では、顔面把手付深鉢型土器が発見されて、この資料は国の重要文化財に指定されています。当館が所蔵する海戸遺跡出土資料は、酒詰仲男（1902–1965）が1938年に発掘調査した縄文時代資料です。多少割れてはいますが、土器の全体的な形をとどめた、いわゆる完形品と呼ばれる土器が19点と、破片土器資料は約200点あります。また、打製石斧や石鏃といった石器資料も収蔵しています（『京都大学文学部博物館考古学資料目録第1部』1960）。完形土器の時期は縄文時代中期です。一番大きな土器（勝坂式）は、突起の先端までの高さが48.5 cmあり、考古常設展にて来館者皆様をお出迎えています。

2024年7月に岡谷市教育委員会より、令和8年度以降の企画展で、当館所蔵資料の里帰り展をおこないたいと、ご相談をいただきました。岡谷市民の方々に、自分たちの地域に眠っていた重要な資料の数々を知ってもらふ機会をつくりたいという趣旨でした。博物館関係教員とも協議を進め、貸出に向けて実物資料の状態確認をおこなうことにしました。その時に、収蔵する完形土器19点のうちの1点が、破損していることがわかりました。長年、木箱の中で綿に包み厳重に保管してきましたが、石膏の老朽化と他の土器の重みによる圧力で、破損してしまったと推察できました。現状を岡谷市教育委員会の方にもご覧いただいたところ、できれば全ての土器を一堂に会したいので修復することはできないだろうかと、相談を受けました。酒詰仲男（後に同志社大学教授）が発掘した資料を、遺跡が所在する地元岡谷市で多くの皆様にご覧いただきたい……その思いは当館関係者も共有しています。しかし、当館には土器を修復する専門の技術職員はおりませんし、修復道具や設備もありません。学外の専門家に修復を依頼すると、費用負担も高額です。そこで、本学文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター（以降、センターと記す）の千葉豊准教授のもとへご相談にうかがいました。センターには、京大文化遺産調査活用

部門があり、構内の発掘調査で出土した考古資料の接合や修復のほか、実測図の作成や拓本など考古学的資料図化をおこない、報告書を作成しています（『京都大学構内遺跡調査研究年報』）。千葉准教授は事情を理解し、通常の業務に支障が出ない範囲であれば、修復作業を引き受けても良いとおっしゃってくださいました。

そこで、壊れてしまった資料の破片を残さず回収し、センターの資料整理室へと運び、どのような修復ができるかどうか、打ち合わせがおこなわれました。修復を担当してくださるのは、河野葵さんです。これまでも本学吉田南構内で出土した埴輪の復原など、数多くの修復を手掛けられてきたエキスパートです。河野さんに資料をご覧いただいたところ、古い接着材を取り外し、接合関係を確認することにある程度時間を要するが、新たに土器そのものが割れてしまった部分はないので、立体的な修復は可能だと、前向きなお応えをいただきました。しかし、ここからが河野さんにとって大変な日々でした。

まず、接合関係の確認を厳密におこなったところ、以前の復原では、石膏が土器破片を覆って接合していました（写真1）。現在でも、破片のない部分で石膏を用いて隙間



写真1. 古い修復石膏の残る破損した土器

の空間を埋める作業はおこなわれますが、この資料では実際の土器片に被せるように石膏が使われており、これらをすべてきれいに取り除いたのちに、新たに接合する必要があります。河野さんは土器本体を痛めることがないように、柔らかい筆を用いて少しずつ石膏を溶かし、取り除いてくれました（写真2）。この作業が一番大変であったと聞いています。土器片がきれいになった後、改めて接合関係を確認して立体的な形へと組み立てていき



写真2. 古い石膏と接着剤を取り除く作業



写真5. 裏打ちをして隙間に復原材を充填する



写真3. 古い石膏や接着剤が除かれた土器片たち



写真4. 土器片を立体的に接合していく

ます(写真3・4)。立体的復原へと進む前に、事前に決めておくべきことがありました。それは、どこまで推測して復原するかということです。土器の修復では、他の類例品から形や文様図形を推測して、復原する場合があります。しかし、今回修復をおこなう海戸出土資料は、土器の口縁部(上部)の文様図形がどのように展開するのか、はっきりとはわかりませんでした。また、口縁の形や高さを無理に推測しても、土器本来の姿を損ねてしまう可能性の方が高いと考えられたので、不明な部分はあえて復



写真6. 復原修復を終えた海戸遺跡出土土器

原せずに、観ていただく皆さんの想像にお任せしようという考えになりました。石膏よりも硬化が早く、加工調整しやすく軽い素材のクレイテックスを用いて充填復原をおこないました(写真5)。充填する部分には裏打ちをして、少しずつ慎重に立体復原をおこなっていきます。実に根気のいる作業です。

約2カ月間かけて、海戸資料は無事に復原されました(写真6)。時期は未定ですが、いずれは当館でも海戸遺跡出土の所蔵資料を一堂に会する展示をおこないたいと思っています。その時にはぜひ、実物資料をご覧ください。

(総合博物館 研究員 高野紗奈江)

夏休み学習教室 体験EXPO2025

開催日：2025年8月2日(土)、3日(日)、9日(土)、10日(日)

夏休み期間中に毎年開催している「夏休み学習教室 体験 EXPO」(以下、学習教室)を本年も開催しました。学習教室は小中学生を対象とした体験型学習イベントです。昨年と同じく8つのプログラムを4日間に分けて行いました。今年もたくさんの応募をいただき、定員を超えてしまったプログラムでは抽選となってしまいました。抽選に外れてしまったみなさん、ごめんなさい。連日暑い日が続きましたが、8つのプログラムを合わせて、合計152名の小中学生が参加してくれました。

今回の学習教室の開催日は、2025年度特別展「夢幻のかたち—数理の生み出す美と不思議—」の開催期間中であり、この展示を監修された立木先生(京都大学)と松浦先生(東京電機大学)にそれぞれ、学習教室のプログラムNo.4とNo.5をお願いしました。立木先生は「これをつなげて何ができる?」というタイトルで教室を開いてくれました。展示にも登場するTriMataと名付けられたパズルを用いて、子どもたちが思い思いにフラクタル図形などを作っていくというものです。いろいろな図形パターンに挑戦したり、図形を組み合わせさせて絵をいかたりと、みんなそれぞれの個性が光っていました。最後はみんなで三角形をつなげて大きくし、無限の世界を体験したのです。みんなで作った三角形は「夢幻のかたち」展にて展示されました。

松浦先生は「遊びで学ぼう!形と動きのフシギ」というタイトルで教室を開いてくれました。身の回りのものを使って遊ぶ方法と、その動きの中に潜む科学を体験してもらうものです。ヤジロベエや回転しながら落ちるプロペラなど、いかにうまく作るか、どこを工夫するといったのか、遊びへのエネルギーが探求心と調和し、子供たちはすごい集中力を発揮していました。松浦先生が監修した展示場の一角にも移動し、体験学習をしました。筒の中でボールが不思議な挙動を見せるのですが、それがタネも仕掛けもない物理なのだと知ると興味津々となり、みんなプログラムが終わった後も筒の装置で遊んでいました。

ここではすべてを紹介することはできませんが、8つのプログラムのそれぞれで、いろいろなものを発見したときの笑顔がいっぱいでした。講師の先生方は何でもないと



No.4「これをつなげて何ができる?」



No.5「遊びで学ぼう!形と動きのフシギ」

うに平然とプログラムを進行しているように参加者の皆さんには見えと思いますが、事前にプログラムの進め方を何度も試行錯誤したり、急な展開にもアドリブで応えたりと、大変な苦勞があったことも記しておきたいと思います。そして今回印象強かったのは、プログラムをサポートしてくれた学芸員実習の学生さんたちです。みなさん積極的に進行をサポートしてくれて、子どもたちにもよく声をかけ、おかげで保護者さん含め参加者はのびのびとプログラムを楽しむことができたと思います。参加者の皆様、ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

(総合博物館 准教授 佐々木智彦)

子ども博物館だより〈9〉

子ども博物館「Ask Me!」

今年度より、子ども博物館の新しい試みとして「Ask Me!」という企画をすすめている。これは、各学生スタッフが自身の専門と関連した常設展示ブースに滞在し、当館の展示品や内容に関する質問を受けたり、補足の解説をしたりして来館者と交流する企画である。来館者は展示を見て疑問に思ったことがあっても、従来ではそれを解決する術がなく、そのまま忘れてしまうことが多い。そんなギモンをその場で解消することで、さらなる学びにつなげることができるとともに、京大の研究成果や研究の面白さの正確な発信に繋がると期待している。また、スタッフ側も将来学芸員となった際、所属する博物館の資料を知り、説明できるようになることは重要であり、その実践の場として経験を積むことができる。このように、来館者とスタッフ双方にメリットのある企画であると考えている。

8月のオープンキャンパスにおいて自身で試行した際には多くの来館者の方と交流することができた。企画中、類似の質問を何度も受けることがあり、自身の関連分野において一般の方がどんなところを不思議に思ったり、面白いと感じたりしているのかを垣間見ることができたのは収穫であった。今後の展示やイベントに活かしていきたいと考えている。



来館者からの質問に答える様子

本企画は他館での取り組みを参考に開始したばかりで、課題や改善点も多いが、今後試行錯誤を重ねてよりよい企画へと洗練していきたい。

(総合博物館 助教 竹之内惇志)

「Ask Me!」で伝える標本の裏側

8月のオープンキャンパスに合わせ、子ども博物館の新たな取り組みとして、展示品を来館者に解説する「Ask Me!」を実施した。展示されている地層のそばで「Q. この地層はどのように採取された？」というプラカードを掲げ、来館者に声をかけた。解説時には、普段の子ども博物館でも使用している剥ぎ取り標本を示し、実際に地層を剥がしていることを視覚的に理解できるように試みた。

解説後に「剥ぎ取る時に使う接着剤はどこで買える?」「(展示されている地層の)断層のずれ方は?」といった質問を受けることも多く、来館者と双方向で交流する機会となったのではないかと感じた。今後も、子ども博物館と並行してこの取り組みを実施すると、博物館の魅力をさらに伝えられるのではないかなと思う。

(理学研究科 博士課程 長門巧)



手元の標本を使って解説をしている様子

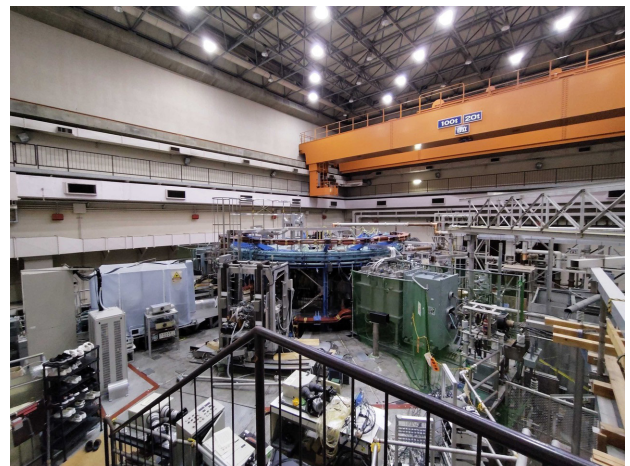
京都大学総合博物館レクチャーシリーズ(第166回)

開催日: 2025年11月8日(土)

第166回レクチャーシリーズを開催しました。「核融合発電への挑戦—プラズマ乱流—」というタイトルで核融合プラズマ実験やマイクロ波計測を専門に研究をされている金史良(エネルギー理工学研究所)先生にご講演いただきました。講演は「核融合とプラズマ乱流」と「プラズマ乱流研究の最前線」の2部からなり、前半は核融合反応と核融合発電の仕組み、磁場閉じ込め方式による核融合装置の仕組みと磁場閉じ込め方式を用いることにより生じる「プラズマ乱流」という課題について概説していただきました。後半は「乱流の時空間スケール」、「突発性輸送」、「乱流計測とデータ駆動科学」という3つの話題についてご紹介いただきました。金先生には、講演の間に適宜質問の時間をはさみながら丁寧に解説をしていただきました。参加者の質問には「(核融合)最初の発火はどのように行うのか?」「なぜ核融合発電の実用化に時間がかかるのか?」や乱流の解説時に用いた物理モデルに関すること、など質問が絶えませんでした。エ

ネルギー問題に関心のある一般の方からプラズマ乱流という現象に興味を持っておられる研究者の方まで幅広い層の方に関心を持って参加していただきました。

(総合博物館 博物館研究員 中川千種)



磁場閉じ込めプラズマ実験装置「ヘリオトロンJ」(金先生提供)

大地は語る2025

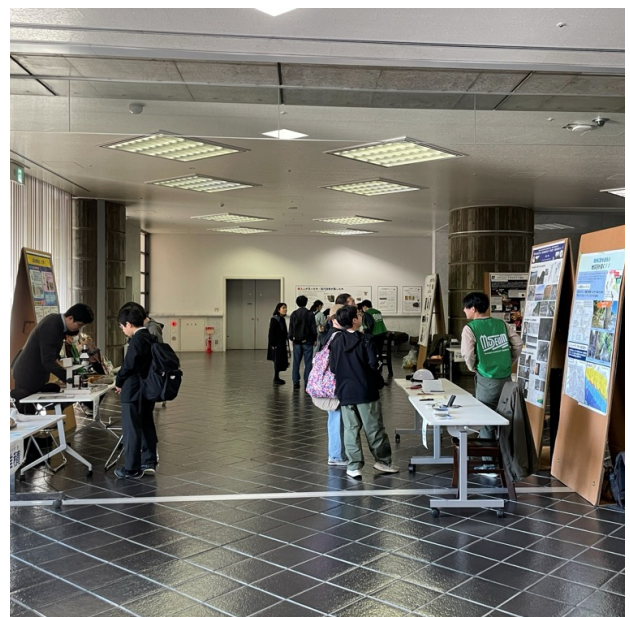
11月15日、京都大学総合博物館で「大地は語る展2025 足もとに眠る物語」が関西文化の日に合わせて開催されました。2008年に地質の日(5月10日)を記念して始まったこのイベントは、2015年に「大地は語る展」と名前を変え、その後も主に京都大学理学研究科地質学鉱物学教室に所属する大学院生有志によって運営され続けております。

地質学鉱物学教室の講座ごとにブースを出展し、普段はなかなか目にするのできない岩石や鉱物、隕石、化石が数多く展示されました。また、体験型のブースも用意し、岩石薄片の顕微鏡観察や、VR露頭観察、摩擦実験などを体験していただくことができました。鉱物ガチャも来場記念のお土産として好評でした。さらに博物館内のミュージアムでは、大学院博士課程や研究者として活躍されている方々に実際の研究内容をわかりやすく講演いただき、地学の面白さ・奥深さをお伝えできたのではないかと思います。我々大学院生も、小学生以下からご年配の方まで幅広い世代の方々と楽しんで交流することができ、普段研究していることを一般の方々にお伝えするという非常に貴重な経験をさせていただきました。

開催日: 2025年11月15日(土)

共催いただいた京都大学総合博物館、当日ご参加いただいた方々に心より感謝を申し上げます。来年もぜひ足を運んでいただければと思います。

(理学研究科 修士課程 徳田慎太郎)



博物館実習(館園実務)2025 実施報告

実習期間: 2025 年 9 月 1 日(月) ~ 5 日(金)

実習では、標本の管理、展示、データベース作成、広報・情報発信、社会教育など総合博物館で日常行われている活動について、教員指導の下で体験する。今年度は、学内から 16 名、学外から 5 名の学生が当館実習に参加した。本稿では、筆者が担当した広報・情報発信について概説する。

今年度は、数学をテーマとした 2025 年特別展「夢幻のかたち」から、来館者の人気を集めたシェルピンスキー立体図形の影絵を Instagram や X での発信を想定して動画制作を体験した。次に次年度開催に向けて準備中の 2026 年度企画展「ゾウ化石」を想定したチラシ制作ならびに SNS 発信の制作体験をした。広報・情報発信においては、企画書や研究者の企画案や論文を読み込んで、展示概要を理解する必要がある。しかし同時に当該分野に明るくない来館者の代表としては、素直に戸惑いや疑問点を言語化し、研究者と企画展来場者との情報格差の橋渡し役を心がけた情報発信の必要性を体験する。

このように博物館の現場で実際に館活動を経験するこ



2026 年度企画展「ゾウ化石」を想定したチラシ制作
(注: 本チラシは博物館実習の制作課題による架空のものであり、記載内容は実際の特別展とは異なる可能性があります)

とが、博物館資料の取り扱いや学芸員としての責任感、社会意識を身につける重要な機会となる。

(総合博物館 准教授 塩瀬隆之)

今宮社神幸祭巡行

令和 7 年 10 月 12 日、今年も吉田神社今宮社の神幸祭剣鉾巡行が博物館正面玄関の前まで来てくれました。最初に吉田今宮太鼓による太鼓が打ち鳴らされると、居合わせた来館者も次第に集まってきました。お腹の底まで響く太鼓の音で十分に盛り上がった後に、剣鉾が練り歩き、威勢の良い掛け声と共に天に向かって何度も突き上げられました。続いて、勇壮な神輿が登場し、博物館の繁栄を願って何度も担ぎ上げられました。太鼓、剣鉾、神輿と続くパフォーマンスに、皆さん見惚れていました。吉田剣鉾保存会の皆様、今年もありがとうございました。

(総合博物館長 高井正成)



招へい研究員

グエン・ティエン・タオ

招へい期間：2025 年 10 月 1 日 (水) ～ 12 月 31 日 (水)

総合博物館の招へい研究員（客員准教授）として、ベトナム科学技術院生物学研究所のグエン・ティエン・タオ氏が 3 か月間の予定で来学しました。アジアにおける陸上脊椎動物の系統分類学と自然史に関する研究を実施するとともに、両国の系統分類学に関する学術交流を進めています。11 月 14 日（金）には総合博物館セミナーで「ベトナム北部の高山地帯における爬虫両生類の多様性と新発見」についての研究発表を行いました。（総合博物館 教授 本川雅治）

My first visit to Japan took place in 2011 during the annual meeting of Herpetological Society of Japan held in Kyoto and visited the Kyoto University Museum for the first time. This event marked the beginning of my academic connection with Kyoto University and provided the opportunity for my first international presentation on rhacophorid frogs from Vietnam. In 2012, I was awarded JSPS RONPAKU Program for a three-year to get PhD entitled "Systematic Study of Rhacophorids in Vietnam", and work closely with leading Japanese herpetologists, including Prof. Masafumi Matsui, Prof. Tsutomu Hikida, and Prof. Akira Mori in Kyoto University, which helped shape my expertise in taxonomy, morphology, and evolutionary biology, laying a solid foundation for my future scientific career.

During RONPAKU Program, I participated in the International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity with representatives from ten countries across Asia, and I received the Best Presentation Award at 2nd Symposium in 2012 in Kyoto. I also joined extensive field surveys in Nagano and Okinawa, gaining valuable insights into field methodologies and species documentation. I completed my PhD in March 2015, and returned to Kyoto University again from April to September 2016, as a Visiting Associate Professor.

Our partnership continued to strengthen. In 2019, I and Professor Motokawa received CGF program grant from the Nagao Natural Environment Foundation. This two-year collaboration led to the discovery and description of two new species and supported the training of a Vietnamese PhD student, contributing significantly to scientific capacity building in Vietnam.

Building upon this success, we now carry 2 projects for 3 years (2022–2025) on vertebrate species diversity in Vietnam: VAST–JSPS Bilateral Joint Research



Project and a Project supported by the Nagao Natural Environment Foundation. These projects have resulted in ten international publications and supported the training of master and PhD students and postdocs from Vietnam and Japan.

To foster strong collaboration, I come to the Kyoto University Museum as a Visiting Associate Professor this time. In this visit, I gave a seminar talk and am making collaboration research and academic exchange with researchers and students in Japan. International scientific partnerships are crucial for advancing biodiversity research, strengthening research capacity, and nurturing the next generation of scientists. The sustained cooperation between Vietnam and Japan continues to generate new knowledge, expand scientific understanding, and create meaningful opportunities for young researchers in both countries.

（総合博物館 招へい研究員 NGUYEN, Tao Thien）



Scientific seminar at the Kyoto University Museum

研究資源アーカイブ通信〈34〉

「博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）」に参加して

2025年7月7日（月）～11日（金）に東京文化財研究所を会場として標記の研修会が開催された。研修には全国の博物館施設から36名が参加しており、最新の保存知識の提供のみならず、講師や参加者との交流の場としても機能していた。

講義は東京文化財研究所保存科学研究センターのスタッフ及び外部の専門家が担当した（参考：講義題目参照）。研修の全体を通しては、以前に受講した「博物館・美術館等保存担当学芸員研修（現・基礎コース）」をアップデートした、より実践的な内容であった。

参考：講義題目

文化財修復原論
文化財の科学調査
空気質（空気質について／空気汚染の文化財の影響／換気の考え方）
保存環境に関する理論と討論
文化財 IPM 概論・実習
修復材料の種類と特性
屋外資料の劣化と保存
近代化遺産の保存
多様な文化財の保存と修復
博物館の防災
民具の保存と修復
大量文書の保存・対策
紙本作品等の保存と修復
写真の保存・管理

研修には、座学だけでなく実習やグループディスカッションも組み込まれており、参加者同士が具体的な課題について意見交換を行う機会でもあった。それぞれの館の状況や課題を持ち寄り、他館の取り組みや専門家からの助言を参考にして、新たな視点や解決策を知ることができた。

なかでも、保存環境に関しては、建物の換気や空調管理、生物被害対策、災害対策などについて、具体的な事例を基にした講義や参加者間での情報交換が行われた。

生物被害対策の講義では、販売中止となった燻蒸薬剤（エキヒュームS）や新種の文化財害虫（ニューハクシミ）についての情報提供や、文化財害虫のサンプルを用いた同定実習（写真1）、清浄度評価検査（ATP測定）（写真2）などの紹介があり、保存業務における知識・技術のアップデートの必要性を感じた。

外部講師による大量文書や写真資料の保存に関する講義は、具体例を取り上げた実践的なものであり、最新の保存技術や資料管理の手法について学ぶことができた。写真資料の保存に関する講義では、大量の写真作品を保

存管理していくためには、それぞれの資料の特性を把握し必要な手当をルーティン化して実施していくことで脱漏を防ぐ工夫がうかがえた。

研究資源アーカイブで取り組む、「劣化フィルムの低温保存」についても有用な知見を得る機会となった。劣化したフィルムから発生する酸性ガスを吸着する薬剤の交換頻度の把握などについて検討を進めたい。

これまで参加した、「一時保管環境の生物被害対策に関するワークショップ」（文化財防災センター，2023）や、「文化財保存修復に関するワークショップ—写真の識別と保存について—」（国立アトリサーチセンター／東京文化財研究所，2024）などの研修で得た知見や経験を今後の業務に活かし、保存環境の改善や資料管理の質向上に努めていきたいと考えている。今後も最新の動向や技術を継続して学び、問題解決に結びつけていけるよう努めたい。

このような研修参加を認めていただいた総合博物館と京都大学研究資源アーカイブ事業に感謝します。

（総合博物館 教務補佐員 上羽真弓）



写真1. 文化財害虫同定実習（左：同定サンプル、右：ニューハクシミ拡大）



写真2. ATP測定（A3法）による清浄度評価検査（左：リミテスターSmart、右：リシバックA3 Surface / SWABふき取り棒）

総合博物館日誌(2025年7～10月)

展示

▶特別展「夢幻のかたち—数理の生み出す美と不思議—」

2025年7月30日(水)～8月31日(日)

[関連イベント] *対面形式での開催

2025年8月7日(木)・8日(金) 総合博物館南館2階企画展示室

展示解説とジャグリングの実演

立木秀樹(京都大学大学院人間・環境学研究所)

松浦昭洋(東京電機大学大学院理工学研究所)

2025年8月10日(日) 総合博物館南館1階 ミュージアム

講演

「イマジナリーキューブ」

立木秀樹(京都大学大学院人間・環境学研究所)

「宙に描くかたち：数理が拓くジャグリングの新世界」

松浦昭洋(東京電機大学大学院理工学研究所)

2025年8月16日(土)・17日(日)・22日(金)・23日(土)・29日(金)・30日(土)

総合博物館南館2階企画展示室

展示解説

立木秀樹(京都大学大学院人間・環境学研究所)

2025年8月31日(日) 総合博物館南館1階 ミュージアム

講演

「イマジナリーキューブで、…」

立木秀樹(京都大学大学院人間・環境学研究所)

「宙に描くかたち：数理が拓くジャグリングの新世界」

松浦昭洋(東京電機大学大学院理工学研究所)

子ども博物館(活動報告)

実施回数：14回

参加者数：子ども366人／中高生10人／

大人370人

スタッフ：61人

博物館セミナー

*対面とオンラインによるハイブリッド開催(第137回より対面のみの開催)

▶第136回 2025年7月11日(金)

カエルの巣—foam nestの不思議

市岡幸雄(京都大学総合博物館)

▶第137回 2025年8月26日(火)

生物多様性保全における動物標本の役割：カンボジア産翼手目の研究事例

Ith Saveng(王立ブノペン大学)

イベント

▶夏休み学習教室 体験 EXPO 2025 夏

2025年8月2日(土)・3日(日)・9日(土)・10日(日)

▶京都千年天文学街道 第45回アストロトーク

2025年8月3日(日)

*主催：認定 NPO 法人花山星空ネットワーク

*共催：京都大学大学院理学研究科附属天文台、京都大学総合博物館

▶京都大学オープンキャンパス 2025

2025年8月7日(木)～8月8日(金)

観覧料無料、特別展イベント

▶京都・大学ミュージアム連携 第13回スタンプラリー

2025年8月30日(土)～2026年3月16日(月)

協力イベント等

▶京都市 留学生優待プログラム「留学生おこしやす PASS」

2025年7月1日(火)～8月31日(日)

▶京都商工会議所 京都・観光文化検定試験(京都検定) 合格者 施設優待企画

2025年9月1日(月)～10月31日(金)

展示協力(学術標本資料の貸出)

▶香川大学博物館(1点)「第28回企画展 カタツムリの世界—在野の研究者・多田昭氏の陸産貝類コレクションを中心に—」

2025年7月17日(木)～10月26日(日)

▶あいち朝日遺跡ミュージアム(1点)「企画展 弥生人といきもの 2025 虫のおしらせ」

2025年7月19日(土)～9月15日(月・祝)

▶滋賀県立琵琶湖博物館(8点)「第32回水族企画展示 淡水魚から見る世界の湖沼」

2025年7月19日(土)～9月28日(日)

▶世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ(1点)「企画展 毒の館へようこそ—博士と学ぶ毒生物—」

2025年7月19日(土)～12月7日(日)

▶大阪府立弥生文化博物館(1点)「秋季特別展 伝世—弥生時代と古墳時代をつなぐモノ—」

2025年10月11日(土)～12月7日(日)

▶公益財団法人黒川古文化研究所(6点)「第134回展覧 倭国の遺宝—古墳時代の舶来文化—」

2025年10月18日(土)～11月30日(日)

▶高槻市立しろあと歴史館(13点)「特別展 戦国動乱の畿内—足利将軍家と細川京兆家の分裂—」

2025年10月18日(土)～12月14日(日)

▶あいち朝日遺跡ミュージアム(3点)「企画展 弥生ファッション—紡ぐ、織る、染める—」

2025年10月18日(土)～12月14日(日)

入館者数

16,746人(うち特別観覧：33団体／1,617人)

京都大学総合博物館ニュースレター ISSN 2758-0784

第65号 2025年12月25日発行

編集・発行：京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

電話：075-753-3272 FAX：075-753-3277

E-mail info@inet.museum.kyoto-u.ac.jp

https://www.museum.kyoto-u.ac.jp/

*ニュースレターは、京都大学学術情報リポジトリ KURENAI でも公開しております。